

ふるじとのかみ
古事記 (1)

あまつちはじめてあらはれしとき 天カアマガハラになるかみのな
天地初発之時 於高天原成神名

アマノミナカノヌシノカミ 訓高下天云 (高の下の天を訓じてアマと
天之御中主神 阿麻下效此 いう 以下これにならう)

つぎにタカミムスビノカミ つぎにカムムスビノカミ
次高御産巢日神 次神産巢日神

このみはしらのかみは みなひとりかみになりまして
此三柱神者 並独神成坐而

みをかくすなり
隐身也

つぎにくにおきなくうきあぶらのごとくして
次国稚如浮脂而

クラゲナスタダヨヘルのとき 流字以上
久羅下那州多陀用弊流之時 十字以音

(流の字の上を以て
十字音を以てす)

あしかびのごともえあがるものによりてなるかみのな
如葦牙因萌騰之物而成神名

ウマシアシカビヒコチノカミ 此神名 (この神の名
宇摩志阿斯訶備比古遲神 以音 音を以てす)

つぎにアマノトコタチノカミ (常を訓じて登許と云い
次天之常立神 訓立云多知 立を訓じて多知と云う)

このふたはしらのかみまたひとりがみになりまして みをかくすなり
此二柱神亦独神成坐而 隐身也

うすのくだんのいつはしらのかみはこゝあまつかみ
上件五柱神者別天神

伝統的に「アメツチハジメテヒラケシトキ」と読まれてきた。しかし「發」を「ひらく」と読むのは本居宣長あたりが権威づけたこと。古来「發」という文字はいろんな意味をつけられている。語形に弓と投げるの手偏の右側を組合せた文字が入っているように、弓を放つ、勢いよく飛び出していくイメーヂが根源的な語意として潜んでいるだろう。そこから「起る」「始まる」「始める」の意味も備ってくる。

古事記にあつては、人類の誕生と生態を「草」に擬えている。人の生命と身体、集団社会の形成のかたちといきおいを、土から育った草と同種と考えていたのだ。そこで、「開」でも「闢」でもなく、「現れる」「伸びる」の意味を含んで「發」が選ばれたと読むべきだろう。「天と地が初めて土から芽を出した時」の意である。

「高天原」も、原文註でわざわざ「阿麻」と訓ず、と断っているのだから「タカマハラ」ではなく「タカアマハラ」と読みたい。

「ガ」入れても入れなくともいい。

「成」も「発」と同じで、土から芽生えた草の姿を重ねて読みたい。

「原」に注目すると、神々の住む天も人の生まれた大地と同じような、草原(くさはら)だったと古代の人は考えていたようだ。

つぎになりしかみのな クニノトコタチノカミ

次成神名 国之常立神 訓常立 亦如上 (常立を訓じて 亦上の如し)

つぎにトヨクモノカミ このふたはしらのかみまたひとりがみになり

次豊雲野神 此二柱神亦独神成

ましてみをかくすなり

坐而隱身也

つぎになりしかみのな ウヒチニノカミ つぎにいも スヒチ

次成神名 宇比地邇神 次妹須比智

ニノカミ つぎにツノクヒノカミ ついでいも

邇神 此二神 名以音 (この二神の名 音を以てす) 次角杙神 次妹

イググヒノカミ

活杙神 二 (ふたは 柱 (しら)

ついで オホトノチノカミ つぎはいもオオトノベノカミ

次意富斗能地神 次妹大斗乃弁神

此二神名 (この二神の名 亦以音 (音を以てす)

つぎに オモダルノカミ ついでいも アヤカシコネノカミ

次於母陀流神 次妹阿夜訶志古泥神

此二神名 (この二神の名 皆以音 (音を以てす)

つぎが イザナキノカミ つぎにいも イザナミノカミ

次伊邪那岐神 次妹伊邪那美神 此二神名亦 以音如上

(この二神名亦音を以て してすること上の如し)

かみのくだりクニノトトタチノカミよりしもイザナミよりまえを

上件自国之常立神以下伊邪那美以前

あはせてかみよなだいとよぶ

并称神世七代 上二柱独神各云一代次双 十神各合二神云一代也

(上の二柱は独り神にして各々一代という 次にたくえる とおの神は各々二柱の神を合わせて一代というなり)

別格の五柱の神が現れては消えた(土中に潜って根となった)あと、さらにつぎつぎと天つ国に神々が生まれて行く。それは、あたかも草木が実をつけて元の茎から離れて行くように、登場し、名を呼ばれ、入れ替わって行く。

こういう名前を羅列する語りは、古代の伝承形式の基本形、世界中の諸民族の説話伝説に見ることが出来る。

日本列島の古代伝承でも同じ語りをしてきたことは大切にしたい。現代人の感覚からは無意味に思われるこの長々しい羅列がどんな重要な役割を果たしていたか、軽々しく判定しないほうがいいだろう。人びとはこの長々しい名前の羅列を楽しんだのだ(ここにも当時の人びとの美に対する欲望の動きが働いていることを受け止めておきたい。と同時に「美」のあり方の変化がここで醸成された)。

それは、声を挙げて読み、それを聞くという動作の連鎖のなかで楽しまれた。この名前を読み上げる行為は古事記のなかでなんども繰り返される。そして、次第に歌謡に取って代えられて行く。この移動は、人びとの関心が美から利へと変って行くのと応じ合っている。

名前を読み上げるとは声を聞くことであって音を聞くことではなかった。おそらくこの名前を読み挙げながら、その語り手(謡い)と聴き手は、ともに踊るような大きな身振りをし合っていただろう。やがて「声」から「音」を聴き分ける習いが育って行く。「声」は内から出、「音」は外から出す)。

古池やかはづ飛び込む水の音 芭蕉
草かすみ水に声なき日暮れ哉 蕪村

(3)

ここにあまつかみもろもろのみこともちてイザナキノミコトイザナミ
於是天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那

美命二柱神修理固成是多陀用弊流之

あまのぬほこをたまひてことよせたまひしゆゑにふたはしらのかみ

国賜天沼矛而言依賜也 故二柱神

あまのうきはしにたたして

立 訓立云
多志云 (立を訓じて多
多志という) 天浮橋而

そのぬほこをさしおろしてえがけば

指下其沼矛以画者

しお こをろこをろに

かきなし

塩許袁呂許袁呂邇 此七字
以音(を以てす) 画鳴 訓鳴云
那志

(鳴を訓じて
那志という)

てひきあぐるとき そのほこさきよりしただれおつるしおのいせき

而引上時自其矛先垂落塩之累積

しまとなる これ おのごろじま

成嶋 是淤能基呂嶋 自淤以下
四字以音(字音を以てす)

そのしまにおりまして あまのみはしらをみたて やひろのでんを

於其嶋天降坐而立天之御柱 見立八

みたてり ここにそのいもイザナミノミコトにとひていはくながみは

尋殿 於是問其妹伊邪那美命曰 汝身

いかなれるかこたへていふわがみはなりなりてなりあはざるところ

者如何成 答曰吾身者成不成合処

ひとつところあり しかしてイザナキノミコトつげるにわがみはなり

一処在 爾伊邪那岐命詔 我身者成

なりてあまりしところひとつところあり ゆゑにこのわがみのあまりし

成而成余処一処在 故以此我身成余

ところをもちて ながみのあはざるところにさしふさぎて

処 刺塞汝身不成合処而

もつてくにうみをなさん うむこいかん

以為生成国土生奈何 訓生云字
牟下效此(生を訓じて字牟と
云う下此に倣う)

伊邪那岐と伊邪那美の二命(みこと)が生
まれるまで、古事記では十六柱の神が先立
ち、神世七代が経過する。日本書紀では、本
編で十柱が先行し、やはり七代に分けられ
る。そうして七代目陽神(おがみ)と陰神

(めがみ)が「命(みこと)」として天つ国
の神々の命を受けて、淤能基呂嶋の創出を
企てる。「天沼矛」は絵筆か鑿の喩である。

それを持って天と多陀用弊流之国に架けた
橋「浮橋」の上から島の図様を「画(えが)」
いたのである。伝統的に「画」は「かく」搔

く」の意味に解釈されてきたが、それでは
太安万侶がわざわざ「画」の字を選ん
だ理由が汲めていない。ここは「描く」の

「画」と読まねばならない。つぎの「画鳴」
もわざわざ「かきなしと訓め」と注を入れ
ている。「鳴す」は「成す」と同声だが、文

字にすると「鳴」と「成」では意味が異なっ
てくる。二命と塩がともに「許袁呂許袁呂
邇」と絵を画き、鳥のように鳴き、歌い踊り

(うたいおどりを書紀では「楽」の字を当
てている)、鳥の形を成すということだろう。
引き上げた矛先(筆先の喩)から滴り落ち

た絵具というようすも、筆に含ませた絵具
が図を画くさまを連想させる。あるいは鑿
が土を彫り形を成すさまも連想させる。こ

のくだりは、神々による芸能芸術の始まり
のさまを提示しているのである。
「見立て」という語がここに出てくる。

「成成不成合」「成成而成余処」「刺塞汝身
不成合処」のところ、性器と男女の性行為
の謂、と解釈されているが、たしかに書紀

には鶴鴿(せきれい)の仕草を真似たと誌
す書も紹介されているから、動物の性行為
も意識しているが、言葉語り綴っている

人の念頭にあるのは、植物の、たとえば南
瓜の交配のさまを彷彿させていることにも
目を向けておきたい。この辺りの二命のや
りとり、まるで芝居を演じているようだ。

イザナミノミコトこたへていはく しかよけむ

伊邪那美命答曰然善

しかしてイザナキノミコトのたまうに しからばあとなど

爾伊邪那岐命詔 然者吾与汝

このあまのみはしらをゆきめぐりあひて みのまぐあひを

行廻逢是天之御柱而為美斗能麻具波

このごとくめぐりてなざむと すなはちのたまうに

比此七字 （この七字音を以てす） 如此之期 乃詔

なはみぎよりめぐりあへあはひだりよりめぐりあはむ およそめぐり

汝者右廻逢 我者自左廻逢 約竟廻

おはりしとき イザナミノミコト さきに あなによしえを

時 伊邪那美命先言阿那邇夜志愛袁

とこをといひ あとに イザナキノミコト

登古袁此十字以 （この十字音を以てす以下これに倣う） 後伊邪那岐命

あなによしえをとめを といひ おのおのこれをいひおはりし

言阿那邇夜志愛袁登壳袁 各言竟之

のちそのいもにつげていうをみななさきごとよからずとしかれども

後告其妹曰 女人先言不良 雖然

くみに おこして うみしこは

久美度邇此四字 （この四字音を以てす） 興而生子

ひるこ このこはあしぶねにいれてながしさりぬ

水蛭子 此子者入葦船而流去

つぎにうまれしはあはしま これまたこのたぐひにいれず

次生淡嶋 是亦不入子之例

イザナミとイザナキの二命によるオノゴロ島作り、そして神殿の見立てが行われた。国産みの着手である。

二命の次の仕事は神生みである。そこで行われる「性」行為へ向かうやりとりは、人間らしさを欠く。見立てた神殿の柱を、女神は右廻り男神は左廻りして出会ったところで「ミトノマグアイ」をしようと約束して「クミドニオコシ」たら、子が生まれた。

この過程に大きく欠けているのは、身籠るということへの関心である。二命による神の生産も、植物の生成に見立てている。無文字文化時代、植物の生のあり方と動物人間のあり方を、文字文化時代の人間のように区別していなかったことに注目したい。これは『楚辞』などにも見受けられるから東アジアに根強い思考感性と言えよう。最初の性行為見立てで生まれた子は、島と

しては不十分な出来栄で、一番目は葦船に入れて流された。どこへ流されたのかは語っていない。二番目の子は「淡島」で子の数に数えないと語られる。ここは、通説は流産したように解釈されるが、「水蛭子」が「葦船」に入れられたという「見立て」は何を意味しているか、考え直す必要がある。

また、二命が柱を廻って出会った時に「アナニヨシエオトコヲ」「アナニヨシエオンナヲ」と言い交わす台詞のやり取りは、ここも芝居がかっている。ここは島を生むという行為を一つの神聖な国産み儀式(美の創出)として見ようとする意識が働いている。

「こをろこをろ」と歌い踊るのは、素朴な美の形。形式化しない「声」と「身ぶり」の段階。御柱と八尋殿の見立ては、美の術「見立て」の試みの段階。そして見立ての柱を廻り「アナニヨシ」と同じ型の台詞を言い合う段階に来て、先の美の術が形式化へと向かっていることが観察出来る。美の術すなわち芸術の誕生。

(5)

ここにふたはしらはかりていふ いまあがうみしこよからずな

於是二柱議云 今吾生之子不良猶

あまつかみのみもとにまうすべしと すなはちともにまゐのほり

宜白天神之御所即共参上

あまつかみのみことにこふしかしてあまつかみのみこともちて

請天神之命 爾天神之命以

ふとまにに うらなひてのりたまふ

布斗麻邇爾此五字以音 卜相而詔之

をみなのさきことよからずによるまたかへりくだりあらためていへと

因女先言而不良 亦還降改言

ゆゑにかへりくだりさらにそのあまのみはしらをさきのごとく

故爾反降 更往廻其天之御柱如先

めぐりここにイザナギノミコトさきにいふ あなによし えを

於是伊邪那岐命先言阿那邇夜志愛袁

とめを あとにもイザナミノミコトいふ アナニヨ

登壳袁 後妹伊邪那那美命言阿那邇夜

シエヲトコヲト

志愛袁登古袁

このごとくいひおはりてみあはせうみしこは アハジノホノサ

如此言竟而御合生子 淡道之穗之狭

ワケノシマ

別嶋訓別云和 氣下效此 (別を訓じて和氣と云 う下これにならへ)

つぎにうまれしはイヨノフタナノシマ

次生伊予之二名嶋

このしまはみひとつにしてめんよつつあり おもごとになあり

此嶋者身一而有面四 每面有名

ゆゑにいよのくにはエヒメといふ

故伊予国謂愛比壳此三字以音下效此 (此三字音を以てす 下こあれにならへ)

さぬきのくにはイヒヨリヒコ あはのくにはオオゲツヒ

讚岐国謂飯依比古 粟国謂大宜都比

メといひ とさのくにはタケヨリワケといふ

賣此四字以音 土左国謂建依別

歌や舞いや台詞が形式化されていく。

それは歌や踊りや台詞が共同性を獲得して行くということである。共同性というのは、個の活動が他者の活動と同じ共通の地盤の上にあり、境界線を共有していることを暗黙の裡に了解し、認め合っている関係にあるということである。その情況にあれば、個は孤立しなくて済むし、また、個の力を無限に拡大させてくれるように思える。共同性は二人の関係(男と女、男と男、人と人、人と神など)から無限多数(親子↓家族↓村↓社会↓郷↓国 etc.)へと拡大する。その拡大を永続させたいという欲望は強く、それだけ個としての人間は弱いからだが、拡大域を守るために法を作り制度を作り、制度をより強固にしようと思ふようになる。このとき、最も有力な働きをするのは、文字になった言葉であり、形式化され定式となった言語である(声ではない)。

この共同性は、それを守ろうとする諸段階で、一つの定式(制度)を持ち、人をその内部に閉じ籠らせ安住させ、閉鎖していることを気づかせない。露伴はそれを「雲の影」と呼んだ。

誕生のとき、美は共同性を持っていない(花は好例)。人間も、おそらく最初に発見した美は共同性を持っていなかっただろう(粥見井尻土偶)。しかし、それはすぐに共同性を要求する。人が要求するのである。共同性を保とうとするところに、美の術が登場する。美の術、すなわち芸術。芸術は共同性の上に成立する。共同性の自覚なしに成立し得ない。共同性の獲得には形式の定式化が必要である。

イザナミ、イザナキが二人で一つの瓊矛(ぬぼこ)を持って歌い踊っていた時は、共同性を獲得していなかった。天の御柱を「見立て」たとき、形式化への試みが始まる。こうして「美」は共有される。